

(参考資料)

31 日本の医学部(医科大学)図書館における

特殊コレクションや稀覯本について

— アンケート調査の報告 —

松木 明知

一、はじめに

欧米における医学部(医科大学)図書館の充実振りは贅言を要しない。とくに米国の各大学医学部は、図書館の蔵書の質と量が大学のランクにも大きな影響を及ぼすことから、その充実に最大の努力を払っている。米国の医学者の先達が、ヨーロッパ医学の水準にできるだけ速やかに追いつき、それに優る米国の医学を築き上げるために、第一になすべきことの一つが医学図書館の充実にあることを賢明にも見抜き、それに向かって懸命な努力を払ってきた結果である。

翻って本邦の状況を考えると、それは洵に貧弱であり、正に惨憺たる状態と表現しても過言ではない。開国以来、

欧米の科学技術の導入に懸命に努力してきたのであったが、しかし日本に導入されたのは技術的側面が主であり、その背後に潜む本質的な面の摂取は少し等閑に付されていったように思われる。

医学においてもその傾向は決して無視できなく、その結果現在見られる如き状況を生み出すに至った。カナダ・アルバータ大学医学部名誉教授(麻醉科学)のジョン・W・R・マッキンタイヤーは、一九七〇年代のカナダの医学教育の改革に尽力した一人であるが、ここ十年間毎年約二カ月にわたって筆者の教室に客員教授として滞在する。彼は日本の医学部図書館の状況についても詳しいが、日本が欧米の科学技術の表面的部分のみ摂取する状況をジャパニーズ・スキミング(Japanese Skimming)と表現している。上澄みのみを掬い取るからである。日本におけるこのような状況を些かでも改善することが肝要と思われるが、その前にわれわれは日本の現況を把握しなければならぬ。このため筆者は平成八年(一九九六)五月に全国の医学部図書館に対して、和書と洋書の特殊コレクションや稀覯本の所有の有無についてアンケートによる調査を行ったので、その結果を報告する。

二、アンケートの結果

全国すべての医学部、医科大学図書館に医学関係の特殊コレクションや稀覯本の所有の有無についてアンケート調査を行った。解答を戴いたのは六六枚で解答率は八二・三パーセントであった。

地域別に見ると、北海道、東北地方の大学には、全く稀覯本や特殊コレクションはないという。関東地方では、まず東京大学医学部図書館に呉秀三の「呉文庫」があり、和洋の医学史関係の稿本、写本一六〇冊が含まれており、その他に病理学を中心とした洋古書九〇〇冊の「リッベルト文庫」、解剖学、動物学、人類学関係の図書二〇〇〇冊の「ワルダイエル文庫」、内科学関係の洋書八八一冊の「島菌記念財団文庫」が主で、この他に「時実文庫」、耳鼻科関係の医書が中心の「岡田文庫」がある。アンケートの解答では右が主であるが和医書については、総合図書館からは「古医学書目録」(一九七八年)が出版されている。

順天堂大学には大きなコレクションがあり、既に「山崎文庫目録」(一九六九年)、「古医学書目録」(一九七〇年)として詳細な目録が発行されている。前者は医史学者山崎佐の旧蔵書である。

日本大学医学部図書館では和書を中心としたコレクション

があり、「古医学資料目録」(一九八四年)として纏められている。

慶応義塾大学には富士川游の旧蔵本を中心とする膨大なコレクションがあり、「古医書目録(改訂判)」(一九九四年)が二十年振りに改訂出版されたが、内容の一部に不備がある。例えば「直舎伝記抄」の編者を記していない。これは渋江抽齋の直筆になる弘前藩の江戸屋敷の宿直日記の抄本である。以前筆者がこれについて、解説の史料を送り、「古医書目録」改訂の際、改めるよう申し入れたが、全くそれが生かされていない。

東京慈恵医科大学にも和書を中心とする古書があり、昭和六十三年(一九八八年)に「古医書目録一」として纏められている。北里大学医学部図書館には「飯山文庫」があり、和医書を中心とするものである。「飯山文庫目録」(一九七五年)として纏められている。

千葉大学医学部分館にも古医書のコレクションがある。医学部の眼科教授であった伊東弥恵治博士の集められた医書を中心とする二千部の蔵書である。概要は「医学古書目録」として昭和五十六年に上梓されている。横浜市立大学の図書館にも総数約一五〇〇点の古医書があり、目玉として「医方類蒙」二六六巻がある。主として戦後寄贈された

コレクションから成り、高田文庫、平野文庫、鈴木文庫が中心であり、目録は平成九年後半には完成するという。

関西北陸地方ではまず金沢大学医学部図書館にも多くの和古医書があり、「古医書目録」および「同補遺版」が昭和五十一年（一九七六）と平成五年（一九九四）に発行されている。次に京都大学図書館の「富士川文庫」が有名である。改めて言及するまでもない。その詳細な目録は「京都帝国大学富士川本目録」として昭和十七年（一九四二）に発行されている。

京都府立医科大学にも六〇冊の貴重書が所蔵されている。冊子としての目録は発行されていないものの、コンピュータで検索可能である。しかしいずれも超貴重本という訳ではない。大阪医科大学図書館の古医書七〇部については、「所蔵古書とその注解」として一九九四年に纏められている。十九世紀から二十世紀初頭にかけての欧米の教科書が中心である。

滋賀医科大学図書館にも多数の古医書が所蔵されている。その中心は「河村文庫」（医書は約七〇部）と「守一文庫」（約六〇部）で、いずれも滋賀県で代々医を業とした河村家、阿部家からの寄贈本である。

岡山大学の鹿田分館にも膨大な古医書のコレクションが

ある。「古医書集成」として昭和六十二年（一九八七）に上梓されている。中心となっているコレクションは岡山藩医学部旧蔵書、地元の蘭方医妹尾又玄の旧蔵書などである。四国地区の大学からは何の解答もなかった。徳島大学は何かコレクションがあると仄聞したが、解答を得ていないので何ともいえない。

九州地区では九州大学が歴史も古く特殊なコレクションがあるかと思われるが、解答はなかった。佐賀医科大学には、マイクロフイツシュ版の「看護学の歴史」があるが、直接医学に関する図書ではない。

産業医科大学には、特殊なコレクションはないものの、ラマッサーニの「*De morbis artificum diatriba*」（一七〇〇刊行）がある。職業病を記述した最初の単行本である。

福岡大学は古医書とくに洋書の収集にも力を入れており、その努力は敬服に値する。一七〇〇年以前の医書だけでも二六冊を数えている。中でも庄巻は一五五三年に発行されたアンドレアス・ヴェザリウスの「*De humani corporis libri septem*」初版本である。本書は日本に現存する同書七冊の中の一冊である。

三、コメントと結語

以上のように日本の医学部や医科大学の図書館に所蔵さ

れている古医書や特殊コレクションの殆どは和書であり、このことは日本の医学の歩みから見ても当然である。しかしその大部分はここ二十年ほどの間に整理され、目録が発行されたことを見ても、和医書の持つ医学史的価値が、これまで殆ど省みられなかったことが如実に理解されるであろう。医学部図書館以外では例えば和書については武田製薬本社の杏雨書屋は大変充実しているし、その他の施設にも多くが架蔵されている。昭和五十一年「日本医学文化保存会」は小川鼎三博士が中心となって全国の有志の方々に呼びかけ、和医書の所在を記して「医学古書目録」を作製し、現在でも研究者に多大な便宜を与えている。

一方古洋医書については、本資料館にエヴァンス文庫を中心とする世界的コレクションがあり、前述したアンドレアス・ヴェザリウスの「ファブリカ」の初版本もある。また「労働科学研究所」にも世界に誇るコレクション「ゲッチンゲン文庫」がある。その中にウイリアム・ハーベイの「血液循環の原理」の初版本が所蔵されている。

われわれは、現在いわゆる西洋医学を教え、そして学んでいる。この西洋医学をより深く、より広く理解するためには、どうしても西洋医学の歴史を知らなければならぬ。より知ろうとすれば研究もしなければならぬし、そのた

めには原典に直接接することが不可欠となる。このことがまた東洋医学のより深い理解にも役立つのである。

古医書の所蔵は研究者の便を計るためだけにあるのではなく、その存在は医学を学び、研究する者の心を鼓舞して、輝かしい将来への道へ誤りなく進ませるものである。確固たる現在を築き将来の発展を期するためには過去をしつかり見つめることが必要であるとの考えから、欧米の図書館は情報管理の一環としても、古医書収集と充実を企てており、それに基づく研究も盛んである。前述したように、客員教授マッキンタイヤー博士は、日本の研究のあり方をスキミングと評した。しかし医学の特定の狭い分野に限っては、日本人による研究が大いに進んでおり、決してスキミングと表現すべき状態にないことを筆者も十分承知している。

日本の医学生の中の基本的には臨床医となるために医学部に進学するのが、日本では一般教養が軽視される傾向は年々強くなっている。もちろん極少数の学生は自分の進むべき明確な進路を持って入学し、それなりに一般教養を身につけるであろう。このことを念頭におけば、医学部へ入学してから卒業するまで、折りに触れとくに病める人間を対象とする医師の教育において、病人を「もの」として

見るのではなく、一個の病める人間として理解することの重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはない。このことを教育するためには、現在のような細分化された科学、医学では対応できない。できないどころか最近の分子生物学至上主義はこの考えに逆行するものであろう。

臨床の現場で現実に生じている種々のトラブルも、所謂「病人」をもとに見做すという誤ったサイエンスの理解に原因していることを考慮すれば、教育する側も、される側も医学史研究の大切さを改めて認識しなければならぬ時期に来ていると思うのは筆者一人ではないだろう。そのためにはまず日本の医育機関において、先人の汗の結晶とも言うべき医書の保存と整備が急務である。今回のアンケート調査は、日本における医史学研究資料の貧弱さとそれに対する医学教育担当者の無理解を如実に示す以外の何物でもない。改革のためにはまず現状の認識が肝要であり、今回のアンケート調査が日本の現状を認識する上で少しでも貢献するところがあれば幸いである。